

# 英語スピーチコンテストの暗唱課題文に関する一考察

山崎 大介

（工学部教養教育センター）

## 要約：

この論文は、富山県立大学において毎年行われている英語スピーチコンテストの暗唱課題文について、音と言語に関するデータという観点から考察することを主たる目的としている。具体的には、（１）発音記号の種類と数；（２）音節の種類と数；（３）イギリスとアメリカの英語発音という３つの観点に焦点を絞って分析することとする。結論として、（１）については、課題文全体の約６割が子音であり、その半数近くが歯茎音である。また、課題文における母音総数の約３割は /ə/ である。そして、（２）に関しては、出現頻度順で上位の音節に /ə/ が含まれている。加えて、課題文における総音節数の６割以上が子音で終わる閉音節である。（３）の英米発音については、/r/ を発音するのかもしれないのかということや複数の母音における違いなどが見られる。いずれにしても、この有名な課題文は、注意深く読み込んで内容面を理解できるように努めるだけでなく、音声面でも指導等を徹底することによって、コミュニケーションにおいて英語学習者の発音がより「わかりやすい」ものとなるために役立つ、有益な学習教材になるのではないかと期待される。

キーワード： 英語スピーチコンテスト、暗唱課題文、発音記号、音節、イギリスとアメリカの英語発音

## 1. はじめに

「スピーチコンテストは、効果的である。」これは、筆者が、大学における「英語」科目を担当する教員として働く中で、ふとした瞬間に思ったことである。昨今、グローバル化が進展し、「英語」がより身近になってきたように思われる。特に、ウェブ会議システムなどが広く活用されることになり、オンライン上にて海外との音声コミュニケーションをより容易に遂行できるような状況もありうる。当然のことではあるが、そうした環境だけを整えることがすべてではなく、英語学習者にとっては、その媒介手段となりうる「英語」という言語を使って、円滑なコミュニケーションを図ることができるようになることも重要であるだろう。実際、そうしたことを実現するために、まずは、英語学習者が英語の「音韻認識」を促進することができ、英語の「音」に慣れることができるような、体系的、かつ効果的な「取り組み」が必要であると考えられる。では、一体どのように展開すれば良いのだろうか。その際に、ひとつの鍵となるのは、戦略的に「英語スピーチコンテスト」を導入して、上手に活用することかもしれない。

そこで、勤務校である富山県立大学（以下、「本学」という。）にて「英語教育改革ディレクター」を務める筆者は、大会実行委員長として、「富山県立大学学長杯争奪 英語スピーチコンテスト」の企画や運営等を全般的に行い、2016年度から毎年開催している（表１を参照）。

表１ 本学における「スピーチコンテスト」の実施状況

回次	開催日 (開催場所)	出場者数 (部門数)
第１回	2016年10月28日 (大学近隣の文化ホール)	5名 (1部門)
第２回	2017年10月27日 (大学近隣の文化ホール)	10名 (2部門)
第３回	2018年10月26日 (大学近隣の文化ホール)	8名 (3部門)
第４回	2019年10月25日 (大学近隣の文化ホール)	9名 (3部門)
第５回	2020年10月23日 (オンラインにて開催)	4名 (1部門)

大会当日には、主として、英語スピーチコンテスト決勝が行われる。これまでのコンテストでは、「学部１年次生の部 Recitation 部門」、「学部２～４年次生の部 Recitation 部門」、「学部１～４年次生の部 自由スピーチ部門」などが設けられてきた。また、アトラクションとして、英語曲を用いて会場全体で発音練習を行ったり、筆者が主宰する「山崎英語塾」のメンバーなどが取り組んでいる各種「山崎プロジェクト」の報告等を行ったりしたことがある。

このスピーチコンテストは、本学における英語教育の一環として実施されており、学生が日頃の英語学習などで培った成果を発表するひとつの機会となっている。

なお、参考までに、筆者が本学に着任した直後に、当時の学部長や事務局長を含む大学の上層部などから、本学での「英語教育改革」を依頼されたという経緯がある。そのため、毎年実施している本学の「スピーチコンテスト」は、本学における「英語教育改革」の重要な「柱」のひとつとして位置づけることができると考えられるかもしれない。

こうした経緯等がある中で、第1回の大会から毎回欠かさず行っているのは、「学部1年次生の部 Recitation 部門」であり、出場者は指定された英語の課題文（Martin Luther King, Jr.による“I have a dream”スピーチの一部分、“Let us not wallow in the valley of despair”から“I have a dream today”までの合計190単語；原文はマーティン ルーサー キング ジュニア・山久瀬訳, 2013, pp. 20, 22 を参照）を暗唱し発表している。この暗唱課題は、本学の授業科目（看護学部「英語1・3」、及び工学部「英語基礎2・4」）における試験課題（成績評価の対象となる「スピーチテスト」）を実施；前期は合計190単語、後期は前期分を含めて304単語を暗唱）にもなっており、基本的に、本学の学部1年次生は、全員が学年共通の教科書として、“I have a dream”スピーチの全編や解説などが収められたテキスト（音声CD付属）を本学への入学時から学習している。

筆者は、「点」ではなく「線」の教育を大事にしている。スピーチコンテストが「単発」の行事にならないようにすることが重要であり、英語の授業と何かしら連動していることが望ましいのではないかと考える。そこで、実際の流れに関するイメージとしては、授業内外での学習の先には「スピーチテスト」や「スピーチコンテスト予選」があり、その後には、練習がある。そして、「スピーチコンテスト準決勝」があり、また練習がある。目標のひとつとなる「スピーチコンテスト決勝」が終われば、また授業内外での練習や「スピーチテスト」がある。こうした一連の流れの中で、暗唱課題を通じて英語の音韻認識を醸成し、英語の音に慣れるようにすることが期待される。

では、この暗唱課題文はどのようなものなのだろうか。そこで、本稿では、本学の英語スピーチコンテストにおける「学部1年次生の部 Recitation 部門」の暗唱課題文（以下、「暗唱課題文」、もしくは「課題文」という。）を、「音」と「言語」に関するデータという観点から分析する。具体的には、(1) 発音記号の種類と数；(2) 音節の種類と数；(3) イギリスとアメリカの英語発音という3つの観点に焦点を絞ることとする。

## 2. 暗唱課題文の音と言語に関するデータ

ここでは、分析対象となる暗唱課題文の音と言語に関するデータを概観する（表2を参照）。

表2 暗唱課題文の音と言語に関するデータ

項目	個数
総語数	190 語
異なり語数	99 種類
総文字数	756 文字
1語あたりの平均文字数	3.98 文字
発音記号の数（イギリス）	598 個
子音の数（イギリス）	22 種類 362 個
母音の数（イギリス）	17 種類 236 個
発音記号の数（アメリカ）	598 個
子音の数（アメリカ）	23 種類 362 個
母音の数（アメリカ）	19 種類 236 個
総音節数	250 音節
1語あたりの平均音節数	1.32 音節
1音節語の数	63 種類 148 語
2音節語の数	23 種類 28 語
3音節語の数	9 種類 10 語
4音節語の数	4 種類 4 語
開音節の数（イギリス）	28 種類 86 音節
閉音節の数（イギリス）	94 種類 164 音節
開音節の数（アメリカ）	29 種類 86 音節
閉音節の数（アメリカ）	95 種類 164 音節
内容語の数	71 種類 99 語
機能語の数	29 種類 91 語
強形と弱形をもつ語の数	18 種類 73 語
英米で異なる発音記号	8 種類 37 箇所

まず、「総語数」については、暗唱課題文において実際に使用されている語をすべて加算した合計値を示す。例として、同じ単語が7回出現したとすると、それぞれを1語ずつ数えるので、合計で7語として計上している。

一方で、「異なり語数」は、課題文で出現した語をひとつの「種類」として数えるため、その出現回数に関しては考慮していない。例えば、課題文において、dream という語は合計8回出現するが、8個や8種類などとして数えるのではなく、「1種類」として算出している。

次に、「総文字数」とは、課題文における190語すべてで使われている文字について合計した数を意味している。例として、difficulties という語は、全部で12文字（d+i+f+f+i+c+u+l+t+i+e+s=12個のアルファベット）となる。

課題文における 756 文字（総文字数）の中で、出現頻度がもっとも高いアルファベットは e であり、全部で 104 回使われている（表 3 を参照）。

表 3 課題文におけるアルファベットの出現頻度

順位	アルファベット	出現回数 (全体 756 文字中)
第 1 位	e	104 回 (13.8%)
第 2 位	t	78 回 (10.3%)
第 3 位	a	69 回 (9.1%)
第 4 位	o	60 回 (7.9%)
第 5 位	i	55 回 (7.3%)

実際、課題文においては、発音されない語末のアルファベット e が散見される。例えば、have や live などである。このことは、アルファベット e の出現頻度が高くなる理由のひとつとして考えても良いだろう。

英語の授業において気づくこととして、英語学習者は、すでに発音方法などを知っている場合を除き、単語をそのまま文字通りに発音してしまい、ローマ字読みになる傾向があるということである。おそらく、視覚による文字情報が発音に大きく影響していると思われる。そのため、「黙字」の取り扱いについての説明やフォニックスに関連するトレーニングなども、英語の授業などで状況に応じて行うことが望ましいのかもしれない。

表 3 に示されているアルファベットの出現頻度に関する順位については、Lewand (2000, p. 36) が示す英語の文字（アルファベット）に関する相対度数を、筆者が順位別にしたものとも一致した。

そして、「1 語あたりの平均文字数」は、「総文字数」(756 文字) ÷ 「総語数」(190 語) により算出した。

発音記号（子音と母音を含む）や音節の種類と数、強形と弱形をもつ語、イギリスとアメリカの英語発音などについては、課題文にある 190 語すべての発音記号等を *Longman Pronunciation Dictionary* (3rd ed.) (Wells, 2008)（以下、「LPD」という。）で調べて参考にした。ただし、この発音辞典における発音記号等については、citation form を基に表記されたものであるため、同化を含む connected speech の現象などについては、基本的に本稿での分析結果に反映されていない。加えて、地域特性を含む細かいところを除外しており、大局的には、LPD で確認できる部分に限り、イギリスとアメリカ英語において主たる発音として取り扱われているものを、それぞれ単語レベルで調べている。

特記事項として、筆者の便宜的な判断等により、本稿における母音の分類や発音記号の表記などが、LPD に記載されているものと多少異なっているところがある。

強形と弱形の分類については、LPD において、“strong form”、及び “weak form(s)” の両方が明記されている語を対象としている。

内容語と機能語は、どちらも合わせると 100 種類となり、「異なり語数」に示されている 99 種類よりも 1 種類多くなるという矛盾が生じている。これは、課題文中にあるひとつの単語について、「副詞」(2 箇所)、もしくは「名詞」(1 箇所) として使用されていると判断したため、それぞれを別個にして種類を数えたことによる。

### 3. 発音記号の種類と数

暗唱課題文における子音と母音の数について、英米で個数に差はなく、母音 (39.5%) よりも子音 (60.5%) の方が多いという状況である。この割合については、Cruttenden (2014, pp. 159, 235) の GB (General British) における数値 (母音 39.4%、子音 60.6%) とほぼ類似している。

まず、子音に着目すると、とても興味深い共通点がある。それは、イギリス英語の第 4 位にある /ð/ (有声歯摩擦音) を除いて、出現頻度順で上位 5 つすべての調音点が「歯茎」ということである（表 4、及び表 5 を参照）。

表 4 課題文における子音の出現頻度（イギリス英語）

順位	発音記号	出現回数 (子音全体 362 個中)
第 1 位	t	46 回 (12.7%)
第 2 位	n	39 回 (10.8%)
第 3 位	d	31 回 (8.6%)
第 4 位	ð	29 回 (8.0%)
第 5 位	s	28 回 (7.7%)
第 5 位	l	28 回 (7.7%)

表 5 課題文における子音の出現頻度（アメリカ英語）

順位	発音記号	出現回数 (子音全体 362 個中)
第 1 位	t	46 回 (12.7%)
第 2 位	n	39 回 (10.8%)
第 3 位	d	31 回 (8.6%)
第 4 位	s	28 回 (7.7%)
第 4 位	l	28 回 (7.7%)

英語における歯茎音 /t d s z n l/ を発音する際、英語学習者が特に注意すべき点を挙げるのであれば、次に述べることではないだろうか。

/ʌ/ (無声歯茎破裂音) : 強い音節の頭にある場合の帯気音をしっかりと発音する (息を強く出す)。

/d/ (有声歯茎破裂音) : 基本的には舌先を歯茎につける (舌のつき方やつき具合に注意する)。

/s/ (無声歯茎摩擦音) : 歯茎付近で摩擦の音が生じる (英語学習者の発音では、とりわけ摩擦の音が小さく聞こえることもあるので、意識して練習する必要があるだろう)。

/z/ (有声歯茎摩擦音) : 複数形などを意味する語末の-s が有声音に続く場合に、無声化の影響を受けているというよりかはむしろ完全に発音していない、もしくはその存在さえ忘れていているという印象を受けることがある。そのため、常日頃から意識して発音の練習をすることが必要であろう。

/n/ (有声歯茎鼻音) : 舌先を歯茎にしっかりとつけて、鼻から息を出す (基本的には日本語の「ん」と区別する)。

/ŋ/ (有声歯茎側面接近音) : 舌先を歯茎にしっかりとつけて、舌の両脇から息を出す (日本語におけるラ行音の頭子音と区別する)。

次に、母音の総数における約3割は /ə/ である (表6、及び表7を参照)。

表6 課題文における母音の出現頻度 (イギリス英語)

順位	発音記号	出現回数 (母音全体 236 個中)
第1位	ə	75 回 (31.8%)
第2位	ɪ	35 回 (14.8%)
第3位	eɪ	20 回 (8.5%)
第4位	i:	18 回 (7.6%)
第5位	e	12 回 (5.1%)
第5位	ʌ	12 回 (5.1%)
第5位	aɪ	12 回 (5.1%)
第5位	i	12 回 (5.1%)

表7 課題文における母音の出現頻度 (アメリカ英語)

順位	発音記号	出現回数 (母音全体 236 個中)
第1位	ə	69 回 (29.2%)
第2位	ɪ	33 回 (14.0%)
第3位	eɪ	20 回 (8.5%)
第4位	i:	18 回 (7.6%)
第5位	e	12 回 (5.1%)
第5位	ʌ	12 回 (5.1%)
第5位	aɪ	12 回 (5.1%)
第5位	ɪ	12 回 (5.1%)

この /ə/ は、「シュワ」(schwa)、もしくは「あいまい母音」などと呼ばれている。筆者が担当する英語科目の授業などにおいては、/ə/ の発音方法として、「ため息をついた時の最後の音のイメージで、力まずにリラックスして発音する」というようにしている。

Cruttenden (2014, p. 159) が示すデータと同様に、/ə/ は英語において出現率をもっとも高いので、しっかりと習得する必要があるだろう。実際、筆者が発音指導等の現場で思うことだが、英語学習者は、日本語の「あ」のように発音してしまい、/ə/ を弱く発音することができていないような傾向がある。/ə/ は、英語の発音をする上では避けて通れず、/ə/ を極めることは、より「わかりやすい」英語発音を習得するための近道なのかもしれない。/ə/ の発音が難しい場合、最初は意識して弱く発音するように心掛けると良いだろう。

#### 4. 音節の種類と数

音節については、イギリスとアメリカのどちらの英語においても、/dri:m/ を除いて、出現頻度順で上位5つすべてに /ə/ が含まれており、それらは強勢が置かれにくい音節であるということがわかる (表8、及び表9を参照)。

表8 課題文における音節の出現頻度 (イギリス英語)

順位	音節	出現回数 (全体 250 音節中)
第1位	ə	19 回 (7.6%)
第2位	əv	13 回 (5.2%)
第3位	ðə	12 回 (4.8%)
第4位	ən	8 回 (3.2%)
第4位	tə	8 回 (3.2%)
第4位	dri:m	8 回 (3.2%)

表9 課題文における音節の出現頻度 (アメリカ英語)

順位	音節	出現回数 (全体 250 音節中)
第1位	əv	13 回 (5.2%)
第2位	ə	12 回 (4.8%)
第2位	ðə	12 回 (4.8%)
第4位	ən	8 回 (3.2%)
第4位	tə	8 回 (3.2%)
第4位	dri:m	8 回 (3.2%)

英語学習者は、とりわけ他との組合せの中で /ə/ を強く発音してしまうこともあるので、/ə/ を弱く発音できるように、常日頃から留意したいものである。

音節に関して考える際に、英語学習者が注意しておきたいことのひとつは、音節の終わりについてであろう。毎年度、筆者が担当する英語科目の初回授業等において、音節とモーラなどの話をするが、その際に例として McDonald を挙げている。実際、英語では、/mæk 'dɒn əld/（イギリス）と /mæk 'dɑ:n əld/（アメリカ）でいずれも3音節となるが、「マクドナルド」は ma ku do na ru do となり6つの母音がある。つまり、英語学習者が英語の発音をする際に、母語の影響等によっては、本来ないはずの母音が挿入されやすくなることもある。こうした母音挿入によって、聞き手側は相手の英語を理解できないということもありうるだろう。

さらに、暗唱課題文においては、母音で終わる音節である「開音節」（34.4%）よりも、子音で終わる音節である「閉音節」（65.6%）の方が多いという状況である。改めて懸念されることとして、英語学習者の発音においては、母語の影響等によって、そうした子音で終わるところへ、本来ないはずの母音が挿入されてしまう可能性があるため、特に注意する必要があると思われる。

## 5. イギリスとアメリカの英語発音

LPD では、イギリス英語とアメリカ英語で発音が異なる場合、どちらの発音記号についても記載されている。暗唱課題文において、英米で発音が異なると見られるところは、全体で8種類37箇所である。出現頻度順で上位5つは、/r/ 発音の有無や母音の違いなどに関連している（表10を参照）。

表10 課題文におけるイギリスとアメリカの英語発音

順位	発音記号		出現回数 (全体で37箇所)
	イギリス	アメリカ	
第1位	ə	ɪ	8回
第2位	ɒ	oʊ	7回
第3位	ɒ	ɑ:	6回
第4位	ɔ:	ɔ:r	5回
第5位	eo	eɪ	4回

英米発音における大きな違いのひとつとしては、ある環境に置かれている /r/ を発音するかどうかが挙げられるであろう。例として、car について、イギリスでは /kɑ:/ となるが、アメリカでは /kɑ:r/ となり /r/ を発音する。英語学習者の中には、/r/ を発音するのが苦手な場合もあるので、英語の授業などにおいて指導する際は、「発音攻略法」のようなものを準備して、対応を考えておくことが良いのかもしれない。

その他には、表10の第3位にある英米発音における母音の違い（イギリスが /ɒ/ で、アメリカは /ɑ:/）なども挙げられるであろう。例えば、top という語（イギリスが /tɒp/ で、アメリカは /tɑ:p/）について、英語学習者が発音すると、イギリス英語発音のように聞こえることがしばしばある。その理由として、top をそのままローマ字読みしてしまう傾向があり、「トップ」のように「オ」の母音が聞こえる感じがするためではないだろうか。一方で、アメリカ英語発音で聞こえるようにするためには、「タープ」のように、どちらかというと長めに、口を大きく開いて、「アー」の母音が聞こえるような感じで発音しても良いかと思われる。英語の授業などにおける練習の際に有効な方法として、/ɑ:/ の発音は、「喉の奥が見えるくらいかなり大きく口を開いて、長めに音を出す」というようなことではないだろうか。

## 6. まとめ

以上、英語スピーチコンテストの暗唱課題文について、「音」と「言語」に関するデータという観点から考察した。結果として、以下に挙げることを、主に見出すことができたのではないかと考える。

- ・課題文全体の約6割が子音である。
- ・子音の半数近くが歯茎音である。
- ・母音の総数における約3割は /ə/ である。
- ・出現頻度順で上位の音節に /ə/ が含まれている。
- ・音節の総数における6割以上が閉音節である。
- ・英米発音の違いには /r/ 発音の有無がある。
- ・英米発音では複数の母音が異なっている。

実際、本学における英語スピーチコンテストの暗唱課題文を分析などしてみてわかることは、もし、この有名な課題文を、ただ表面的に、そして機械的に暗記をして発表するだけならば、それは実にもったいないということであろう。内容的にも注意深く読み込んで理解するように努めるだけでなく、それと同時に、音声面でも指導等を徹底することによって、コミュニケーションにおいて英語学習者の発音がより「わかりやすい」ものとなるために役立つ、有益な学習教材になるのではないかと考えている。

今後も英語学習者が目的や目標をもって着実に学べるような「仕組み」が形成され、総じて相手に「わかりやすい」英語発音になるように、ひいては円滑なコミュニケーションを図ることができるようになるための「取り組み」が、さらに活発に展開されることを期待するものである。

## 引用・参考文献

- オックスフォード大学出版局（編集）（2020）.『オックスフォード現代英英辞典 第10版』東京：旺文社，1960ページ.
- 柏木哲也（2005）.「自由英作文における学習者コーパスの文章の種類別品詞分析から得られる教育的示唆」『STEP BULLETIN』Vol. 17, pp. 33-47.  
[https://www.eiken.or.jp/center\\_for\\_research/pdf/bulletin/vol17/vol\\_17\\_p33-p47.pdf](https://www.eiken.or.jp/center_for_research/pdf/bulletin/vol17/vol_17_p33-p47.pdf)  
 (参照 2020 年 12 月 20 日).
- 菅原真理子（編集）（2014）.『音韻論』東京：朝倉書店，朝倉日英対照言語学シリーズ 3, 180 ページ.
- 塚本聡（2020）. KWIC Concordance (Windows Installer 版) (Version 5.3) [コンピュータ ソフトウェア].  
[http://dep.chs.nihon-u.ac.jp/english\\_lang/tukamoto/kwic.html](http://dep.chs.nihon-u.ac.jp/english_lang/tukamoto/kwic.html)  
 (参照 2020 年 12 月 8 日).
- 服部義弘（編集）（2012）.『音声学』東京：朝倉書店，朝倉日英対照言語学シリーズ 2, 164 ページ.
- マーティン ルーサー キング ジュニア（著者）・山久瀬洋二（翻訳・解説）（2013）.『I Have a Dream!』東京：IBC パブリッシング，144 ページ.
- 山崎大介（2018）.『富山県立大学 山崎プロジェクト 成果報告書 2018 年度版』富山県立大学 山崎プロジェクト，40 ページ.
- 山崎大介（2019）.『富山県立大学 山崎プロジェクト 成果報告書 2019 年度版』富山県立大学 山崎プロジェクト，50 ページ.

- Cruttenden, A. (2014). *Gimson's Pronunciation of English* (8th ed.). Abingdon-on-Thames, England: Routledge, 410p.
- Lewand, R. E. (2000). *Cryptological Mathematics*. Washington, DC: The Mathematical Association of America, Classroom Resource Materials, Vol. 16, 199p.  
[https://books.google.co.jp/books?id=CyCcRAm7eQMC&pg=PA36&redir\\_esc=y#v=onepage&q&f=false](https://books.google.co.jp/books?id=CyCcRAm7eQMC&pg=PA36&redir_esc=y#v=onepage&q&f=false)  
 (参照 2021 年 1 月 2 日).
- Wells, J. C. (2008). *Longman Pronunciation Dictionary* (3rd ed.). Harlow, England: Pearson Education Limited, 922p.

## 謝辞

本論で述べられている「富山県立大学学長杯争奪 英語スピーチコンテスト」は、第1回の大会から、毎回、富山県立大学の学長裁量経費における⑤特別経費の B 学長特認経費「研究教育成果の情報発信」による助成をいただいた。また、コンテストを開催するに当たり、参加学生や審査委員会の皆様を含め、多くの方々や機関などから、多大なご理解やご協力等を頂戴した。関係各方面の皆様方に心より厚く御礼を申し上げる次第である。

## 備考

本稿では、筆者がこれまで担当してきた英語科目の授業等において、実際に発音指導をする中で気づいた点などについても言及している。その中には、今まで、受講生としてもっとも多かった「日本語を母語とする英語学習者」に関する視点なども含まれている。

# A Linguistic Perspective on Recitation Material for an English Speech Contest

Daisuke YAMAZAKI

Centre for Liberal Arts and Sciences, Faculty of Engineering

## Abstract:

This paper sets out to investigate some phonetic and linguistic data on recitation material for an annual English speech contest at Toyama Prefectural University in Japan. More precisely, the following aspects are the principal targets of the analyses in this study: (1) types and numbers of phonetic symbols; (2) types and numbers of syllables; and (3) British and American English pronunciation. In conclusion, it seems that there are various kinds of findings which could be applicable to phonetic instruction in an EFL classroom. As for (1), consonants account for nearly 60% of the phonemes arranged in the entire script, and almost half of them are alveolar ones. Moreover, around 30% of vowels are occupied by a weak vowel /ə/ or schwa. In terms of (2), apart from /dri:m/, the top five syllables of the material in the relative frequency of occurrence tend to contain the /ə/ vowel. Furthermore, over 60% of the syllables interspersed in the whole recitation text are closed ones which have a coda, i.e., a syllable ending with a consonant or consonants. Concerning (3), one of the major differences between British and American English pronunciation is rhoticity, i.e., whether or not /r/ is pronounced in certain positions. In addition, it appears that there is some differentiation in vowels. Hence, it is hoped that the recitation material would be utilised as a useful language learning tool for practising intelligible English pronunciation, if EFL learners make every strenuous effort to comprehend the contents of the speech and if it is actively employed in educational settings.

*Key Words:* English speech contest, recitation material, phonetic symbols, syllables,  
British and American English pronunciation